

## 1、名前・肩書き

江本純子・劇作家

## 2、今回の応募動機（理由・目的）

わたしは東京で都市暮らしをしながら劇作家として活動しています。2016年に小豆島で滞在制作、2017年にアイスランドを旅して以降、暮らしと芸術の親和について思索してきました。2019年にスペイン、モロッコ、ベトナムを訪れてからは、暮らしと芸術の親和の形のひとつとして「民芸」なるものに惹かれるようになりました。わたしにとって民芸とは、人々の消費やマーケットの中にある都市芸術とは異なり、各自が各自の暮らしのために、生きていくために作っていく行為・作品を、指しています。旅人としてその地域に滞在することで、その地域にとっての親和性の高い民芸に出会い触れられることを期待しました。

アーティスト・イン・レジデンス（以下AIR）の滞在受け入れ先のひとつに「アートラボ北舟」がありました。サイトにあった写真は、2017年に体感したアイスランドの景色と重なり、ときめきました。わたしは、この地で、この地に暮らすみなさんのコミュニティにお邪魔しながら、“創作のための時間”を過ごしてみたいと考えたのです。この地とは、十勝の「豊頃」という町でした。



「アートラボ北舟」サイトに掲載されている豊頃の写真 撮影：白濱雅也



アイスランド・ソールスヘプンの夜

創作のための時間、とは。わたしは劇作家として映像制作と演劇制作を行なっているのですが、そのどちらにとっても今後の作品に必要な思索の時間を過ごすことです。思索の先に、具体的な創作のアイデアが立ち上がったり、アイデア同士が結合したりします。創作のための時間（その1）とは「作品作りのための思索」です。

一方でわたしは、作品作りによるストレスと疲れを溜めすぎていました。ストレスと疲れは、わたしの身体を不機嫌にしていたし、不機嫌な身体を無理やり動かしながら作品を作っている状態から脱するための時間が必要でした。豊頃に行きたい、と思ったのは、

アイスランドで過ごしたような時間を過ごせることを予感したからですが、アイスランドで過ごした時間とはすなわち、作品作りの目的をもたずにひたすら「休む」こと。まさしく「サバティカル」でした。「休む」こともまた創作のための時間（その2）と言えます。

### 3、支援を受けて実施した活動内容（行なった事、訪れた場所、出会った人、印象的だったエピソードなど）

1/15～2/14の31日間、北海道中川郡豊頃町の体験住宅「カラマツの家」を暮らしの拠点に、「十勝」を少しずつ周遊していました。

創作のための「思索」と「休む」、このふたつの時間を過ごすことが今回の滞在でわたしが行なっていたほぼですが、「思索」と「休む」は脳と身体に矛盾を起こします。相反していた二つの時間でしたが、次第に「休む」についての「思索」が始まったことにより両者は内包しあう関係にもなりました。31日間の「思索」と「休む」記録を、わたしは映像でも残しました。この記録の集積は「不機嫌な劇作家が機嫌をよくするために実践した記録と思索」として、いずれどこかで発表したいとも思っています。

A	B	C	D	E	F	G	H	I
1月15日	1	東京発	白濱夫妻と	アンビエントな音楽と絵画	それまでの睡への備え	寒い夜		
1月16日	2	体験住宅in	白濱家からの朝風景	役場の村田さん	紫色のマジックアワー	初めてのセイコーマート		
1月17日	3	メディテーションはじめ	朝散歩はじめ	コーセーごりごりメディテーション	喜びの朝食	積ん読の解消を目指して	機材システムを組む	
1月18日	4	何も帰られない不安から	ヨガから始まるメディテーション	積ん読メディテーション	暖・手袋問題	どこにいても変わってない	産院に運送する景色	
1月19日	5	しほろでの出会い	読金いりの旅人	読金いりの暮らし生活(ハーブとスパイス)	ナシラ舎の冷蔵庫と湯	ナシラ舎とアサヒ堂のメンバーそのころは		
1月20日	6	junk 日	bookcafeの東鏡	「旅の作品のためのプロセス」という悟り	2001年からの積ん読終わる	Ospro沼(快適V-logを考えるとたどり着く)	まだらことしらたき	
1月21日	7	風呂水への喜び	灯油バニック	風呂水瞑想(貴重大事)	種家演習	防風林とセーター(ノルディックテキスタイルとカウチン)		
1月22日	8	散歩瞑想への意圖	ブーツ履物	駅・沼への散歩	天然cafeへの心得	Stockを減らした先に行きたい	人生は積ん読の連続	
1月23日	9	瞑想ではなく欲しいのは集中	ルームブーツ履物	読書と運動は習慣のための訓練	美しい習慣システムとは		雪夜しんしん	
1月24日	10	除雪という瞑想	除雪に集中(みごと)	除雪は徒勞	カウチンセーター履物	キリない煩悩と除雪		
1月25日	11	車の運転研修	sorelデビューの朝散歩	集中が散漫になるとき=ストレスと直結	北方領土と右翼	白線へ nothern食堂	フォトジェニ得意道	
1月26日	12	すべらん散歩	日の出・目玉焼き(もって早く)	パウダースノウ	牛の匂い・幻覚	歌う・声をだす	暖への執着	
1月27日	13	なしとけなくていい	仕事しました	空が明るくなる感動=暗くなっていくさみしさ	はじまりはおわりのはじまり	旅人として関わる誠意		
1月28日	14	スケートリンクの美	高井さんありがとう	朝日さん、高橋さん、でんどうさん	ごぼう茶	なんか充足		
1月29日	15	何もしない日=タスクの消化	散歩の神様シマさん・爆気	とよこ絶景	何もしない日を作れない裏	月がいつも見ている	今を感じる訓練	
1月30日	16	東原地/帯広へ	豆時間	ほんだカーリースサイキさん	サ活コミュニティ	ペットのような車	車という幸せ・充実感人のために使う時	
1月31日	17	旅仲間登場	海鮮/プロノ/マジックアワー/鹿パーティー		二人でシェアする幸せ(バリエーション)			
2月1日	18	作るよりも動く	朝散歩/再び絶景スノウマン/留真温泉	毛糸の靴下編んでられない(おばがき)	雪降るハルニレ(死にそうな)	絶景とスノウマン	長手とか風呂原石	藍アヒージョ
2月2日	19	天運絶景	ジュエリーアイスって					
2月3日	20	ファンタスティックすぎる	ともこさんすごい	ばんせい	向井さんと牛	夜に光る牛舎	高遠・さりんか	
2月4日	21	月夜とまつりや	GoPro登場	白濱さんのアート	ご近所ドライブ	まつりや		
2月5日	22	帯広ひたすら	百年記念館	市民ギャラリー	畜産大学とソフトクリーム		作ると動く	
2月6日	23	恵さざる田原家	劇作家さん(わたしは何しにここにきたの)	暮らしへの軌道から暮らしからの恵	パン、チーズ、ミルク	酪農	ジュエリー2回目行っつきてんぶら	
2月7日	24	白子でんぶらで暮れる	旅からの旅プランを練る					
2月8日	25	旅からの旅1	タウシュベツとわかさぎキャンプ	トランス白樺	ほろか温泉世界一	シカミ様と風呂、北歌		
2月9日	26	旅からの旅2	ほろか温泉の極楽	三国峠	ヌプカでホワイトアウト	妙なかなの温泉		
2月10日	27	旅からの旅3	イズナを見た！！	本当の修行・氷上露天風呂	神田日勝			
2月11日	28	わたしのための時間ではなく	ジュエリーアイスがアイスすぎ			命が縮む旅行		
2月12日	29	わたしのための時間ではなく	再び絶景で	厚別海で		誰かの作品のために動く気持ち		
2月13日	30	わたしのための時間ではなく	ともこさん、向井さん、カワマタさん	牛、牛、牛、雪、雪、雪		スノーモービルからの視界 帯広でアンビエントアート		
2月14日	31	十勝発	新道り地蔵(観、灯油、ヤマト、掃除)	田原さんに会いにこころ		帯広に着かない道(運転ばかりしてた)		

31日間のメモ



＊

「休む」編として実践していたいくつかは、報告としては取るに足らない事柄ばかりです。「読書」「散歩」「運動」「コーヒー豆を挽く」「風呂水を浴びる」等・・・ふつうの暮らしじゃないか、と突っ込まれそうですが、これらは「休めない」身体 of 劇作家にとっては、そのいちいちの実践と、その結果に得られる感動が大きな意味を持っているのです。わたしは、これらの時間を経て到達する目標地点を「瞑想」と呼び、これらを「休む」ための「修行」と呼びました。そして滞在中はこの修行を習慣化させていくこともまた修行の一環になっていました。

たとえば「読書」。読書できない身体状態に対する苦痛がわたしにはありました。気持ちいい読書を成立させることは、わたしにとって「休められている身体状態」の証です。わたしの身体が読書できない理由は、脳を雑念（ノイズ）が支配しているからです。ノイズがある限り、わたしの体は読書できない＝休めない身体、なのです。

よって、休むために、脳内のノイズを掃除することを画策したわけですが、わたしの脳内を占めるノイズの多くは「あれしなきゃタスク」たちです。タスクからの解放も兼ねて、「積ん読を解消する読書」と名付けて日々実践してみました。

今回、選書した本の中には、もっとも長期間、2001年からの積ん読本があります。20年モノの「読まなきゃタスク」から形成されて身体に化石のようにこびりついてきた頑固なノイズ。この一冊は滞在初期に読み終えることができました。少しむくみがとれた日の朝、のようなスッキリ感と共に、わたし自身の思考20年の変遷を振り返る機会ともなりました。

また、日々の読書修行を通じて、「北」の魅力についても思いを馳せた日記を残しています。

かつてアイスランドの旅で立ち寄ったエイイルスタジルという町で、ブックカフェに出会ったことがある。アクティブになるには限界のある寒い地域で、インドアで本を読み続ける、その静けさと集中の空気・・・に美しさを感じた。たっぷりとホットコーヒー、ひどく甘そうなケーキを添えた、読書のためのセットも魅力的だった。

そうか、あれは北の暮らしの心地よさだったのだ。しんしんと雪降る景色が見える窓辺で本を開き、ごりごり挽いたばかりの香り強いコーヒーと豊頃町名物「朝日堂」のアメリカ

カンドーナツを目の前にして、シンクロした。とても穏やかな、この読書時間への愛おしさ。とにかくわたしは、北の暮らしに「穏やかさ」を求めているのだろう。

\*

作品のための「思索」として。地域芸術を探求するテーマをもつわたしとしては、地域の方々とお話をしたり、関わりをもつことが、これからの作品と活動に対する「思索」の始まりとなります。滞在中に出会い、ひとときを共に過ごしてくださったみなさん全員に感謝しています。

特に、滞在コーディネーターでもあり「アートラボ北舟」を運営する美術作家の白濱雅也さん・真紀さんの紹介を通じて出会うことができた酪農家の田頭さん夫婦、幕別町でCaféを営んでいた友子さん。友子さんを通じて知り合った向井牧場の向井さん。限られた時間でしたが、みなさんの暮らしの一端を覗かせてもらいました。

都市の劇場やギャラリーで作品を発表している人だけがアーティストなのではなく、「暮らしを営んでいる人はみなアーティスト」であり、彼らが作る/生み出すものこそ、誰かを幸せにするかもしれない「民芸」だと、改めて思索を始めそうになるわけですが、そういう思考の整頓は二の次にもなりました。

彼らの暮らしに宿る豊穣さに触れるだけで、不機嫌な劇作家の身体と精神はみるみると癒されていきます。その豊穣さは、彼らの人柄・人物からもきらめくように溢れ出ていました。これをリハブというのか、リトリートというのか・・・高濃度なサバティカルだったと振り返ります。



サイロ前にて 田頭さん夫婦と



田頭保さんとわたし



筋金入りの旅人・友子さん





友子さんとわたし





向井さんの牧場で生まれたばかりの子牛



向井さんとわたし

#### 4、支援プログラムに参加した意見・感想 (応募した際の目的の達成度、効果・成果として実感した事)

滞在途中から、わたしは「休みたい」のではなく「気持ちのいい集中」を「獲得したい」のだと気づきました。少しずつですが、心地よさ（いま）を感じるための、集中力（＝いまを感じられる脳みそと心のペース）を得ていくことができました。それは豊頃をはじめとする十勝周辺地域にて“修行”を行えた効果がとても大きいように思います。はじめは景色だけの関わり、人と関っていくにつれ景色は動きはじめ、さらに土地を感じる深層部に身体を踏み込ませていった、そんな経過を体感しています。そうして、喜びや美しいものに触れて身体もまた開いて癒されていく。滞在の後半、合流した旅仲間・遠藤留奈さんと共に、いくつかの地域に足を伸ばしたのですが、ノイズのない「集中して感じる」身体に変化していることを実感しながら、出会うものへの淀みない感動を感じる心地よさを体感しました。

雪、太陽、月、防風林、風、暗闇、出会った人たち、遭遇した動物たち・・・あらゆる十勝の空気に包まれていた31日間の幸せは、健やかに休み、穏やかに生きていくための数



年分の栄養としてわたしの身体に蓄えられました。アーティストにとってセルフケアの重要性を、改めて認識しました。

豊頃で見つけた、不機嫌な劇作家にとっての、ベストオブ民芸を感じたハイライトを挙げると、酪農家の田頭さんのお家でパンをいただいたときでした。十勝産の小麦、天然酵母、牛を知り尽くした田頭さん自家製の乳製品など、原料はばっちり地産品。しかし、このパンがわたしにもたらした幸せの威力とは、それだけではないのです。芸術が生まれる道筋には、暮らしへの執着や集中があるものと、わたしは考えていますが、田頭さんのパンは、暮らしへの執着の結果というより、もっとおおらかなエネルギーを発していました。これを私は、田頭さんから誕生した「暮らしの恵み」だと名付けています。さりげなく・・・通常運転で、暮らしの恵みを形にしている田頭さんは、本当に素敵でした。

その土地の自然と対峙した上で、その暮らしをより幸せにするものを作る。その地域にとっての自然的芸術を模索中のわたしにとって、ふと寄り道のような感覚で得られた答えのひとつです。



田頭さんのパンとチーズ。チーズは喫茶ふわり（豊頃町）でも販売中





恵みが溢れていた田頭綾子さん



滞在後半から旅に合流した遠藤留奈さん



豊頃の夕



豊頃の朝



鹿と遠藤さん





ご機嫌な劇作家・江本純子

## 5、コーディネート団体(AISプランニング・中間支援団体)に対しての意見・感想 (自治体 が実施する支援プログラムとの違い、良かった事や改善点など)

AIRの特性上、コーディネート団体はアーティストの生活を含む時間に関わります。見知らぬ土地で暮らす上で、最低限必要な生活上の知識や情報をシェアしていただくことは大変ありがたいです。

一方で、その特性はアーティストの公私領域が曖昧にならざるを得ないことも意味するわけですが。たとえばわたしのように、暮らしそのものを創作活動に直結させる傾向が強いアーティストの場合だと尚更、他者からは一見して公私領域の境目がわかりづらくなるものと思われれます。つまり、コーディネート側が意図せずして、アーティストのプライバシーに踏み込む危険があります。回避策としては、支援プログラム主催者とアーティストの間の事前作業として、生活を含む活動内容に対するアーティストの”意図”を共有し、滞在全体での”公私の線引き”を決める、あるいは”私的領域のありか”をアーティストは伝え、団体側はそれを把握しておくことが大事のように思いました。その対話の結果に、アーティスト各々で全く違うはずの、それぞれの十人十色な要望がクリアになるように思えます。そして中間支援団体にとっては、アーティストの要望がクリアに伝わっていればいるほど（キャッチしていればいるほど）、コーディネートの方針も立ちやすくなるのではないのでしょうか。

・・・それでも齟齬をゼロにすることは難しいように思います。プライベートな領域について、自ら表明することは困難だったりしますし、そういう話をする時間をシステム的に設けられたところで、クリアにお話できないのが、私的領域自体がもつ難しさだからです。解決してくれるのはルールやシステムではないようにも思うのですが・・・わたし自身もアーティスト側の立場として引き続き考えてみます。今回、支援プログラム・コーディネーターの小田井真美さんがかけこみ寺かのごとく、いつでもドアを開いてくださっていたことは、大変心強かったです。

